

**平成 26 年度 第 1 回
釜石市東日本大震災検証委員会 学校部会開催結果**

1 日 時 平成 27 年 1 月 23 日 (金) 午後 6 時～8 時

2 場 所 釜石市役所第 4 庁舎 3 階 第 7 会議室

3 出席委員 7 名

菊池義浩 部長、荒澤幸子 委員、雲南昌明 委員、加藤裕二 委員、佐々木雄治 委員、市川淳子 委員、山崎秀樹 委員

4 他部会からの出席委員 1 名

副委員長 柏崎龍太郎

5 欠席委員 なし

6 オブザーバー 1 名

岩手県教育委員会事務局学校教育室 森本晋也

7 事務局出席者 7 名

副市長 若崎正光、総務企画部長 小林俊輔、危機管理監 赤崎剛

総務課長 千葉敬、総務課震災検証室長 白澤渉、同室主任 池田正明、同室主事 川崎悠嗣

8 庁内検証委員会・作業部会 3 名

教育次長 菊池郁夫、子ども課長 高橋千代子、子ども課子ども福祉係長 武藤佳代子

9 傍聴者 1 名

10 経 過

[千葉総務課長]

定刻の 6 時となりましたので、平成 26 年度の第 1 回釜石市東日本大震災検証委員会の学校部会を始めます。

本日は委員の皆様、全員出席でございます。そしてまた、検証委員会の副委員長である柏崎龍太郎様も、全体の検証の参考としたいということで出席していただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに、若崎副市長から挨拶を申し上げます。

[若崎副市長]

どうも皆様、お晩でございます。御紹介いただきました副市長の若崎と申します。平成 26 年度の検証委員会学校部会開催にあたり、一言、御挨拶申し上げます。

委員の皆様には寒いところ、全員御出席いただきまして感謝申し上げます。平成 26 年度の検証委員

会の進め方について、11月19日に皆様全員にお集まりいただきました。これが全体会という位置付けでございます。これ以降の議論を3つの部会、具体的には災害対策本部部会、学校部会、避難所・地域部会の3つの部会に分けてそれぞれ議論を深め合うということで、皆様から同意をいただいたところです。

本日は学校部会として1回目の会議になります。岩手大学の菊池先生に部会長をお願いしております。先生、どうぞよろしくお願いいいたします。また、本日、オブザーバーとして、岩手県教育委員会から森本先生がお越しでございます。どうぞ先生、よろしくお願ひします。委員の皆様には、どうぞ忌憚のない御議論をお願いします。

釜石の防災教育が高い評価を内外から得ているというのは、正に事実です。マスコミに釜石の奇跡と取り上げられていますし、国連や世界銀行には釜石ミラクルということで伝わっております。内外から高い評価を受けていることは大変有名ですが、でも釜石の子どもたちは、これは奇跡ではない、自分たちはふだん通りのことをしただけだと。至って謙虚で、たくましい限りです。市も自らは釜石の奇跡という言葉は使わないということで申し合わせております。

しかし、一方でこの震災の実態を見ますと、児童の引き渡し、あるいは教職員の避難といった、大変残念な課題があったのも事実です。市教育委員会は、震災の翌年の3月に、学校が安全な場所であることを前提に、津波災害が予想される場合には、学校の管理下に置き、子どもを引き渡さないといったことを徹底いたしました。これは正に全国に先駆けた先駆的な方針だったと思っています。

都会では、東日本大震災の風化が少しずつ叫ばれてきていると聞いています。しかし、地域の宝である子どもたちの安全をどう考えるか、これは正に全国共通の課題だと思っています。私たちが経験した東日本大震災で、学校・子ども関連施設における震災当時の避難状況がどうだったのか、現段階で分かる範囲で可能なかぎり、資料に取りまとめる努力をさせていただきました。是非とも本日もこの資料に基づいて、市民目線でしっかり御検討いただき、課題と教訓を浮かび上がらせて、釜石らしい議論を進めていただければと思います。

本日は山崎副市長が、委員として着席しております。また、作業部会としてスタッフも控えております。どうぞ御質問等あれば対応させていただきますので、よろしくお願ひします。

3月中に何とか中間報告を得たいと思っており、それを考えますと大変スケジュールはタイトでございます。そういう中で誠に申し訳ありませんが、活発な御議論をどうぞよろしくお願ひ申し上げまして、私からの御挨拶といたします。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

[千葉総務課長]

続きまして、検証委員会の学校部会の部会長でございます、岩手大学地域防災研究センター特任教授の菊池先生に挨拶をお願いいたします。

[菊池部会長]

只今、御紹介に与かりました、岩手大学地域防災センター特任助教の菊池と申します。この度、委員会の承認をいただきまして、学校部会の部会長を務めさせていただくことになりました。よろしくお願ひいたします。

申し訳ありませんが、座ってお話しさせていただきたいと思ひます。

東日本大震災の発生から4年が経過しようとしておりますが、釜石市ではこれまで継続して検証に取り組んでおられます。先ほど、若崎副市長のお話にもありましたように、釜石市は震災前から小中学校の防災教育に取り組んでこられて、各地から注目されているところだと思ひます。その点からも、この部会は重要な位置付けになるかというふうに感じております。

私はこれまで建築系の農村計画、都市計画を主に勉強してきたのですが、東日本大震災の発生以降は、被災地復興の支援、研究活動にも携わらせていただいております。盛岡市の出身で一度、県外に出ましてから、昨年度から岩手大学のほうで勤務させていただいております。

現在は、東日本大震災時の小中学校の津波避難行動調査なども取り組ませていただいております。昨年度から、いろいろな先生方に御協力いただいて、たくさんのお話を伺うことができました。その中で特に強く感銘を受けましたのは、やはり学校施設の防災というものは、地域コミュニティと切り離しては考えられないというお言葉でした。それは私もそのとおりであるというふうに感じております。

後ほど、部会のテーマの説明もあると思いますけれども、地域が協力し合って、子どもの安全というものをどのように守っていくのか、その大切さというものも改めて考えて、少しでも実践に動き出すような議論の展開に寄与できればというふうに考えております。

また、そのためにも、議員の皆様にも率直な意見を出していただくことが大切だと思いますので、今回の震災の教訓を踏まえまして、学校施設の防災対策、防災教育など、この先につながるような議論の展開に努めていきたいというふうに考えております。

皆様の御協力をいただきながら、本部会を有意義なものにしたいと考えておりますので、どうぞ、御協力よろしくお願いたします。

[千葉総務課長]

2番の説明事項に入ります。説明事項につきましては、震災検証室の白澤室長から、御説明申し上げます。

[白澤震災検証室長]

震災検証室の白澤です。どうも、よろしくお願いたします。申し訳ございませんが、座って説明させていただきます。

具体的な説明に入る前に、資料の確認をしたいと思います。事前に、「釜石市東日本大震災検証報告書（案）（学校・子ども関連施設編）」「東日本大震災における学校・子ども関連施設の震災対応状況一覧表」「学校部会のテーマについて（案）」という資料をお配りしております。そして本日、「次第」とあと1部重複しますが「名簿」、「施設の位置図」ということで、カラー版でA3折りの物をお配りしております。

これに加えまして、情報提供でございますが、1月31日に産業育成センターで、避難所運営フォーラムが震災検証室の主催で行われます。民間施設の避難所の実態を明らかにするというところで開催しております。参考までにチラシを同封しておりますので、よろしくお願いたします。

早速、説明事項の1番、学校部会について御説明したいと思います。資料は部会の名簿でございます。部会は7名。そして、オブザーバーの方ということで、構成されております。部会については、菊池部会長が進めます。また、オブザーバーとしまして、岩手県教育委員会学校教育室の森本先生にお越しいただいております。

[森本オブザーバー]

どうぞよろしくお願いたします。

[白澤震災検証室長]

先生は震災前に釜石第二中学校、釜石東中学校で教鞭を執られておりました。特に釜石東中学校では、防災教育のしおり、こういった物を作成しております。震災当時は一関のほうにおられましたけれども、

震災後、釜石市教育委員会、そして大槌町の教育委員会に派遣で来られており、実際、被災地の再建やその後の状況を把握しております。よろしくお願いいたします。

事務局としまして、特に作業部会として、教育委員会から菊池教育次長と、子ども課から高橋課長、武藤係長が出席しておりますので、よろしくお願いいたします。

部会の進め方についてですけれども、これにつきましては皆様のほうにお配りしたテーマに沿って進めたいと思いますので、よろしくお願いいたします。加えまして、質問票で個別の施設の状況に質問がある場合は、事前に取りまとめることと御連絡しておりました。これに対する提出はありませんでしたので、御報告申し上げます。以上が、(1)の部分でございます。

続きまして、(2)「検証報告書(学校・子ども関連施設編)の素案作成について」を御説明します。内容につきましては、お配りしました報告書を御覧いただきたいと思います。

まず、全体の報告書の構成について御説明したいと思います。この報告書は全部で3章から成り立っております。第1章は検証の目的、方法。第2章では、学校・子ども施設の総評ということで、それぞれ被害状況、対応状況、課題を取りまとめております。この部分が今回の検証報告の中心部分になります。

第3章につきましては、各施設の個別の対応状況ということで、これは昨年度調査したものを更に補充したという形になっております。

これに加えて、資料としまして、本日お配りしました位置図。そして、各施設の対応状況一覧表。こういった形で報告書を構成しておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、順を追って、報告書の第1章から御説明したいと思います。

まず、2ページですけれども、検証の目的ということで記載しております。震災当時、学校の施設で所在していた児童などは、全員一命を取り留めることができた。しかし、震災後の引き渡し等のほか、施設の業務に従事した職員の一部は、残念ながら犠牲となった。こういったことを踏まえまして、本検証では、施設前の備え、避難行動、安否確認、受け渡し、こういった対応を確認したいと思います。そして、課題と対応策を明らかにしながら、地域で子どもの安全を守るための方向性、こういったものを明らかにしていきたい。これが検証の目的でございます。

第2節の検証の体制ということで、委員会を設置しまして、本学校部会でこれらの協議をしております。これに加えて、外部有識者ということで、岩手大学の先生から御助言、御指導をいただくということにしております。

2ページの下の方にいきまして、検証の方法ということで記載しております。これらの学校・子ども施設の避難行動については、先ほど申し上げましたとおり、平成25年度に取りまとめた検証報告書の資料編、これを精査・補充しまして、課題・対応策をまとめております。

続きまして、3ページ目です。検証の対象ということで、この学校施設という定義ですけれども、津波被災地域、又はその学校の児童・生徒が通っている小中学校。これをこの検証では学校施設というふうにしております。子ども施設もこれに準じまして、保育園、子育て支援センター、児童館、学童育成クラブ、こういったものを検証の対象としております。これらの対象に、これまで庁内の検証委員会で作業を進めてまいりました。特に学校施設については教育委員会の総務課、子ども施設につきましては子ども課と調整を取りまして、原案を作成しております。以上が第1章の部分でございます。

続きまして、第2章の検証の総評というところで御説明します。まず、学校の施設の被害状況ということで、最初に人的な被害状況ということでまとめております。先ほど申しましたとおり、児童生徒の施設内での犠牲者はありませんでしたが、引き渡し等によって8名の方が亡くなっております。また、これに加えて、職員につきましても3名の方が亡くなり、2名の方が行方不明になっている状況でございます。また、建物につきましても、3施設が全壊しているという結果になっております。

続きまして、4ページの下のほうにいきまして、震災前の備えというところで、釜石では防災教育に取り組んできたということで、これは今まで群馬大学などと、このような防災教育の取り組みを進めてまいりました。

5ページを御覧いただきます。そしてこの取組の成果の中で、津波防災教育の併記。こういったものを作成しまして、各小中学校が取り組んできたところでございます。

6ページの(3)にいきまして、避難訓練の状況ということで、特に当市の特徴的な訓練としまして、この2つが挙げられております。まず1点目は、登下校時を想定した避難訓練をやってきたと。また、2点目として、小中合同で避難訓練をやってきた。こういったことがこれまでの備えの部分で、特徴的な避難訓練ということで挙げられております。

続きまして7ページに飛びまして、避難の対応状況ということで、幼稚園、小学校、中学校が行いました対応状況について記載しております。3番の課題・対応策としまして、学校施設としては3つの課題ということで掲げております。

1点目の課題としましては、「学校に保護者が迎えにくるため、教職員が対応せざるを得ない事態になった」と。2点目としまして、「保護者が学校からの連絡待ちで家に待機していて、その結果、津波の被害にあってしまった」と。3点目は、引き渡した児童、学校に残っていた職員が犠牲になってしまったということで、この3つの課題を整理しております。

これに対しまして、対応策としまして、5つの対応策を掲げております。1点目は、地震発生後はそれぞれが安全な場所に避難する。2点目としまして、震災マニュアルを整備する。3点目としまして、教職員の資質の向上を図る。4点目としまして、防災教育、津波避難訓練等を通じて、防災意識、実践力を高める。最後に、地域の状況把握、地域の連携を深めると、こういった対応策を考えているところでございます。

続きまして、11ページにまいります。教育委員会はどのような対応をしてきたかということで整理させていただいております。教育委員会につきましては、鈴子の教育センターにあったわけですが、直接の被害はなかったものの、通信等が途絶したと。目前の被災者対応、こういったものに追われていたというような、教育委員会の震災直後の状況でございます。

13ページにまいります。教育委員会がどのように各施設の被害状況を把握したかということで掲載しております。教育委員会としましては、被災者対応によって、被災調査に遅れが生じてしまっているということでまとめております。ここでは、幼稚園児の被災を中心にまとめさせていただきました。教職員の被害状況についての部分については、学校施設のほうで触れているところでございますが、今後どのように教育委員会として、被災状況、職員の被災状況を把握していったかにつきましては、今後、示していきたいと思っております。

続きまして、14ページになります。子ども施設。最初に被害状況ということで、人的被害につきましては、これも同じく施設内での犠牲者はなかったのですが、一時避難先で保護者に引き渡して、4名の保育園児等が亡くなっているということでございます。

続きまして、震災前の備えということで、防災訓練の状況について記載しております。各施設では法令に定める火災、地震、こういった様々な災害を想定した訓練をしてきました。ただし、津波災害に特化した訓練、これは必ずしも十分とはいえなかったのではないかとということでまとめております。

15ページにいきまして、それぞれ各施設の対応状況を記載しております。これらの課題としまして、大きく2つ挙げております。1点目としまして、施設管理下の避難、子どもの危機管理、保護者への対応が曖昧であったと。これにつきましては、保護者への引き渡し方法など、こういったものを今後決めていきたいということで、主な対応策として考えております。2点目としましては、近隣住民との協力・連携が必要だということで、この関係を構築していくということを掲げております。

第3項の市の対応としまして、子ども課、当時は地域福祉課でしたけれども、この状況について記載しております。これも同じく保健センターにいたわけですけれども、通信等が途絶えました。そしてまた、避難者対応に追われていました。施設所間の把握が十分ではなかったということでまとめております。以上が第2章の部分でございます。

第3章以降については、学校施設、子ども施設の個別の対応というところで記載しております。これの一覧表としまして、それぞれ表にまとめたのが、事前にお配りした状況一覧表ということでまとめておりますし、それに加えて本日、位置図を追加させていただきました。

以上が、検証報告書の概要でございます。よろしくお願いたします。

[千葉総務課長]

皆様、説明事項に関しましては、何か御質問などありますでしょうか。もし可能であれば、3番の協議の中で、併せて説明事項に関する御質問等もお受けできるかと考えておりますので、よろしくお願いたします。

早速ですけれども、3番の協議に入ります。ここからは菊池先生に、部会長に進行をお願いしたいと思いますので、よろしくお願いたします。

[菊池部会長]

3番目の協議テーマに移りたいと思います。よろしくお願いたします。

お配りしてある資料の中に、「学校部会のテーマについて(案)」という資料があるかと思います。そちらを御覧いただければと思います。

本部会の、まず1番目、進め方についてですけれども、この本部会の進め方につきましては、先ほど御説明いただいたように、大きなテーマとして、今後、津波など災害が起きた場合に、子どもたちの安全をどう守っていくのかをテーマの中心にして進めていければと考えております。部会の委員の皆様からは、このテーマに沿って、市民目線から学校・子ども関連施設、市の対応策などについて、どのように感じたのか御意見をいただければというふうに考えております。それで、第1回目は、学校などが対応した内容を確認していただきまして、第2回目は、子どもの安全を守るための連携のあり方などを中心に、議論を進めていければというふうに考えております。

それらを踏まえまして、テーマの設定ということで、第1回目の本日ですけれども、「学校・子ども関連施設及び市の対応状況と改善に向けた課題」。サブタイトルは、「震災対応の課題と実践について市民目線で考える」とさせていただきます。協議のポイントとしましては、「発災前および発災当日の対応状況について確認」すること、「今次震災の教訓から得られた問題点と改善策を点検・検討」すること、「改善策の実践に向けた課題を検討」することとしております。

それを受けまして、第2回目では、「地域で子供たちの安全を守る取り組みと役割～この先の学校、地域、行政との連携の在り方～」をタイトルに、協議のポイントとしましては、同じく3点。「子どもの安全を守るためのそれぞれの役割」「地域が一体となった防災の具体的な取り組み」「日常的なコミュニケーションと関係構築」こちらを案として提示させていただきました。

まず、こちらの進め方とテーマにつきまして、皆さんの御意見をいただければと思うのですけれども、こちらの内容で進めていくことについては、よろしいでしょうか。何か御意見がありましたら、お願いたします。

こちらでよろしければ、こちらの内容で進めさせていただきたいと思います。

早速、本日の協議のポイントの、発災前及び発災当時の対応状況についての確認なのですが、こちらは先ほど御説明いただいたように、報告書の中に詳しくまとめていただいております。それを受けまし

て、「今次震災の教訓から得られた問題点と改善策を点検・検討」こちらについてなのですが、資料を見ますと、7ページ目の下のところで、まず学校施設の課題と対応策についてまとめていただいております。こちらの内容につきまして、事前に目を通していただいたと思うのですが、何か不足している点でしたり、お気づきの点などがございましたら、御意見をいただければと思います。

[佐々木委員]

佐々木と申します。よろしくお願いたします。

議論の前に、7ページの課題のところ3つほどポイントが記載してあるのですが、「学校に保護者が迎えにくるため、教職員が対応せざるを得ない事態となった」とか、自宅で待機していたというようなことが書いてあるのですが、これって実際、学校サイドとしてはどういうマニュアルというか、どういうルールが決められていたのかということ、最初に聞いておきたいですね。

私も住まいが根浜ですので、どうしても鶴住居小学校とか、釜石東中学校のことがどうしても頭にあるものですから、鶴住居小学校の職員が結局、犠牲になっているわけなのですが、なぜ職員が残ったのかという理由を突き詰めていくと、結局、保護者が迎えに来るかもしれない、あるいは電話が来るかもしれないということで待機していたというふうに、想定をするわけです。

最後のところの真実は誰にも分かりませんが、こういうケースの場合、学校としては待機していなさいというルールに事実なっていたのかどうか、マニュアルがどうなっていたのか。小学校のマニュアルと中学校のマニュアルは一緒なのかどうか。その辺が、実はこのまとめの中には書いてないですね。

実は、そこはすごく大事なポイントなので、現実的にそういうマニュアルがあったのかなかったのか、もしあったとすればどういうマニュアルになっていたのか。私も震災後いろいろと鶴住居小学校の職員の関係もあるので、教育委員会ともいろいろと話をしていた経過があるものですから、その辺をまず聞いておきたいということです。

それから、津波に対するマニュアルというのは本当にあったのかどうか。私が聞いているかぎりでは、洪水とか地震の場合のマニュアルは想定としてあったと聞いていますけれども、津波を想定したマニュアルがあったということは、聞いたことがありません。その辺もあったのかどうか。いろいろマニュアル関係についてもお聞きしたいのですけれど。

[菊池部会長]

ありがとうございます。

それにつきましては、市の担当者からお答えいたします。

[菊池教育次長]

教育委員会の菊池です。よろしくお願いたします。

津波の際のマニュアルということですが、学校ごとに違うと思いますけれども、防災教育の中では、津波が来た際の対応については、各家庭で話をしようということ。それで、その際、子どもたちには、「自分たちは逃げるから、逃げているということを知って、親も逃げてください」と。そういう話し合いをするということになっていたというふうに聞いております。

そして、波が引いた後に避難する場所を決めておいて、そこで落ち合おうではないかという話をしていたということですが、それが浸透しきっていたかどうかということについては、まだ十分ではなかったのではないかと考えております。

[佐々木委員]

学校の職員に対するマニュアルみたいな物はあったのですか。先ほど言ったように、待機しないといけないというようなものが、マニュアルとしてあったのかということです。

[菊池教育次長]

それについては、各学校での状況だと思いますが、我々のほうでは確認はしておりません。オブザーバーで来ている森本先生、何かあったかどうか教えていただければと思います。

[森本オブザーバー]

岩手県教育委員会の森本です。釜石東中学校のマニュアルの件で、私は震災の前年度まで（釜石東中学校に）勤務してまして、記憶が曖昧な部分も多少はあるのですが、津波を想定したマニュアルはございました。

改定もして、特に登下校も含めて、尾崎白浜方面から来る場合は、スクールバスによっては沿岸部を通りますのでどういうふうにするかというのもありましたし、地震が発生したらどういうふうに避難するかというマニュアルはありました。

ただ、これは釜石東中学校でもそうですが、県内の沿岸部では保護者の方に引き渡すという前提で、学校は考えていた部分はありました。釜石東中学校の引き渡しがどうだったかという、今、記憶が曖昧なのですが、釜石市に限らず、基本的に学校はきちんと引き渡すということになっていたのです。

先ほど、菊池助教のお話にあったように、防災教育の中ではそれぞれがそれぞれに逃げる、津波でんでんこ、そういったことを釜石東中学校でも教育としてやっておりましたし、例えば実際、震災後、あるお父さんは釜石中学校の生徒であった娘さんと家庭の中で確認する時に、いざと言う時にはお父さんはお父さんで逃げて娘さんは娘さんで逃げるというふうに確認し合っていたので、お父さんは迎えに行くのを思い止まって、職場の避難場所に行ったというふうに伺っています。

[菊池部会長]

ありがとうございます。

今の御指摘でまず1点、教職員の方の避難対策、避難マニュアルということがあったと思います。こちらにつきましては、私もいろいろと小中学校の状況についてお話を伺っているのですが、やはり視線は生徒にあったのではないかと思います。生徒と一緒に逃げていけばというのものもあるかもしれませんが、その点についての対策は今後の課題であるというふうに考えられますし、この報告書の中にも、その点については触れられているかと思います。保護者の方は引き取りに来ないことを前提に避難するといった文面が入っていたかと思えます。

もう一方で、保護者の方は自分の子どもを迎えにいらっしゃるのですね。こちらは伺った範囲でのお話なのですが、そこでやはり議論も起きてしまうわけです。それをどのように防いでいくのかということは、やはり日常的なコミュニケーション、保護者の方と学校との信頼関係の構築ということが今後の課題になってくるというふうに感じました。

この点につきまして、ほかに何か御意見ありますでしょうか。

[荒澤委員]

鵜住居保育園の荒澤と申します。私も引き渡しということに疑問を抱きまして、保育園が被災する前に、小学校で引き渡し訓練というのがありまして、見させていただいたのですね。

そしたらすごく時間がかかって、広い場所が必要で、駆け付ける保護者や御父兄の方など仕事してい

る方は来ることができなくて、車で遠くからお爺さんお婆さんが来ていたり大変で、これっていったい何のメリットがあるのだろうと、実は思っていたのですね。

それで、被災当日も、私たちが保育園から恋の峠まで逃げる間、ございしょの里で一時、中学生と小学生が待機していた時に、引き渡しを受けようとする保護者の車で一杯でした。それで、我々が避難する道も半分しかなくて、そこを逆行してくる車があって、とてもスムーズに避難できるような状態ではなかったのです。それで、この車さえなければ我々も楽に避難できたし、もっと多くの人も楽に避難できたのではないかと思うこともありました。

結局、そこで引き渡しはなかったと思うのですが、あの中で、車の中で待っていて犠牲になった人はいなかったのかと後で思ひまして、こういった場合の非常事態の引き渡しというのはどんなものだろうかとか引かかっていたのですね。実際、その場も本当に混乱して、大変だったという記憶がございます。今後、止めたということなので、私もほっとしています。

保育園もやっぱり親御さんに返したが故に亡くなった方が1名おります。それで、そうでなくても危ないところまで親御さんが子どもを連れて、波を見て慌てて戻ったということもあったので、私たちは保護者の方を信じたあまり、津波は危ないものだという危機感を私たちと同じくらい持っていると思ってしまったのですね。ところが、そうではなくて、保護者は大丈夫だと思いながら自宅に向かって、波を見て慌てて引き返したということもあったので、引き渡しというのは本当に考えさせられました。

[菊池部会長]

ありがとうございます。

ほかに、御意見はありませんか。

[市川委員]

今の話の流れで私も日頃ずっと思っていたことなのですからけれども、平成23年3月11日に東日本大震災で被災しましたが、2月の避難訓練は地域と学校が連携して、学校に保護者の方が子どもを迎えにくる引き渡しの避難訓練で、地域では私たち民生委員に協力要請があって、参加できる方々はそこに立ち会ったという経緯がありました。ただ、その時の私たちの皆の認識が、余りにも、ただ子どもを迎えに来るという意識しかなかったのではないのでしょうか。津波に対しての危険ということで、どう対処しなければいけないかという認識がなかったのではないのでしょうか。

だから、親御さんたちは、何の目的で訓練が行われているかというのがやはり浸透していなかったために、学校や子どもを預かる施設に迎えに行くという行動を取ったと思いますし、迎えに行った時、家に帰れば安全だという安易な判断ミスもあったと思います。津波発生時、もう絶対に家ではなくて海から離れた高い所、安全な所に避難するという認識をここではっきり教訓として示していかなければ、どんな災害においても命を失うということを二度と起こしてはいけませんので、その皆との認識を徹底的に変えていくというところが一番大事ではないかと思い、今まで過ごしてきました。

あと、親御さんへの引き渡しというところで、平成25年の3月あたりに、当時の釜石市教育委員会の川崎教育長が、安全が確認されるまで学校は子どもの引き渡しを絶対しないと断言されました。これをもっと強く私たちはアピールしていかなければならないし、親御さんや地域との連携というところに、その意識もきちんと伝えていかなければいけません。これがまた教育委員会で示されても、頭に残っている親御さんが今どれくらいいるのだろうと不安になります。

7ページのところに、津波注意報、津波警報が発表され解除になるまでというところがあるのですが、私たちが実際、教育委員会にいまして、一番の悩みどころが、この警報の捉え方と注意報の捉え方です。警報については、教育委員会のほうで判断してきちんとまとまった避難行動を示すというは

つきりした方向性はあるのですけれども、注意報ということになりますと、各学校の学校長や施設長といった方たちの判断に委ねられるというところがあって、そのところにも難しさがあるのではないのでしょうか。

非常時に判断しなければいけない立場になった方たちが、実際に1人でどう判断するかというのは大変難しさがありますので、そこに鶴住居幼稚園の大変さもあったのではないのでしょうか。最高管理者であっても、日頃からやはり相談し合ったり声を掛け合ったりしていても、どれが最善なのかと、咄嗟になった場合に皆、迷うと思います。それを正しく瞬時に判断して子どもの命を守るということを、最高責任者1人が判断するには、余りにも難しさがあるのではないのでしょうか。

それから、震災時、鶴住居小学校の校長と副校長が不在でした。その時のリーダーが指揮をふるうときに、やはりそのところまで煮詰めて、マニュアル的に掘り起こして考えていかなければ、また繰り返してしまうことになるのではないのでしょうか。

私たちは尊い命を失っていますので、是非そこまで掘り下げた上で検証していくのが私たちの役割ではないかと思ひまして、ここに來ています。

とりあえず、今は以上です。

[菊池部会長]

ほかに御意見はございませんでしょうか。

今のお話についてなのですけれども、どうしてもポイントとなるような事例はあると思ひますし、ただ、その個別の問題というよりは、そこから見えてくる全体への対応といいますか、それを踏まえてどう改善していくのかというのを考えることがすごく重要なのではないかと感じました。

そのことを御指摘されているのかと思ひますけれども、その情報の判断といいますか、津波警報、津波注意報、情報が入ったときにどう判断するのか。これまでの事例で恐縮なのですが、地域住民、自主防災組織の方、消防団の方に声を掛けていただいて、適切な判断ができた学校もあったかと記憶しております。

そういった学校だけでは対処しきれない部分を地域全体でフォローし合って、地域の防災力を高めていく。そういうことも課題として浮かび上がってきていると感じております。

また、最初の佐々木委員からの御指摘で、教員のための避難マニュアル、また、津波避難に対しての避難マニュアルがあったかどうかということでしたが、これは報告書に加えていただくことは可能ですか。

[菊池教育次長]

マニュアルがあったかどうかについては、各学校に確認したいと思ひます。

[菊池部会長]

あとで、よろしくお願ひいたします。

ほかに、この対応策の内容につきまして、御意見などありましたらお願ひいたします。

[佐々木委員]

最初の発言の時に舌足らずな部分があったのでフォローさせていただきたいのですが、私はマニュアルの有無が問題であるというよりは、その当時の人たちが、もしマニュアルがあったとすれば、それに基づいてどういうふうに行動されたのかを知りたいということがまず1つです。要は、何が言いたいかという、例えば鶴住居小学校の先生方の対応の仕方と、隣である釜石東中学校の先生方の指示の仕方

が違う。同じ隣近所にいながら、子どもを指導しなければいけない立場の先生方の対応に事実、違いがあったわけです。だから、そういう意味でマニュアルの有無を聞いたのが1つなのですね。

それで善し悪しは別にしても、当時の小学校の先生方の避難指示の仕方によって、そういうことと釜石東中学校の指示が違うという事実はあるわけなので、その辺の事実をしっかりと捉えた上で、じゃあどうしましょうかという対策を考えていかなければいけないと思うのです。

なので、この資料ではすごく一杯いろんなことをまとめていただいているのですがけれども、個人的な感想としましては、一部肝心のところが抜けているような気がしました。例えば、保育園とか幼稚園の場合は、マニュアルがあったかどうかは分かりませんが、どういうふうな避難の指示の仕方をしたのか。鶴住居小学校はこうでした、釜石東中学校はこうでした、釜石小学校はこうでしたと、学校ごとでどういうふうに行ったかということがある程度書いてはいるのですがけれども、そこに統一性が見られないという感じもするし、もうちょっとそこら辺を掘り下げて、正に市川委員がおっしゃったように、事実をもう少し掘り下げた中でこういった資料をまとめていただいたほうがよいのではないかと思います。

すごく大変な作業だと思うので、口で言うほど簡単なものではないとは思いますが、まずはもう少し事実を掘り下げることが大事ではないでしょうか。その上でどう改善していくかという議論になっていけばよいのではないかと思います。

実例とすれば、3月11日の前、3月9日にも大きな地震がありまして、その時、実際にはほとんど津波は来ませんでした。その時の対応の仕方として、結局3月11日に同じような対応をしたという部分があるのですよ。この辺がもしかしたら災害を大きくした要因というか、被害者を大きくした要因なのかもしれないというのが、個人的な感想です。

それから、先ほどから出ていますけれども、保護者が迎えに来る問題についても、事前にそういう訓練をされていたという部分があります。そういうことをやっていたからマニュアル化したということなのですね。だから、議論の進め方としては、「震災前、こういうマニュアルがあってこういう訓練をしました。その結果として、もし被害者が大きくなったのだとするならば、そこはやっぱりまずかったの、じゃあそこは見直してこしましょう。」ということだと思います。やっぱり現実から目を背けずに、事実をきちんと見た上で、対策を考えていったほうがよいのではないかと思います。

[菊池部会長]

ありがとうございます。

個別施設の対策、当時の状況対策につきましては、第3章のほうに、こちらでは十分ではないのではないかと御指摘だと思うのですが、まとめていただいております。今おっしゃられたように、問題点があるならばしっかりと掘り下げた上で今後の対策を考えていくということは、御指摘のとおりだと思います。

けれども、震災から4年が経過して、今後の方向性をどこかで見出していく時期になっていることも確かだと思います。学校再建が進んでおりますし、震災の記憶などこの先どんどん風化も進んでしまうかもしれませんので、まずはこの段階で今まで検証してきた内容を踏まえて、今後の対策を考えていければと捉えております。

こちらにつきまして、何かございませんか。

[白澤震災検証室長]

今の御指摘につきましては、もう少し各施設の状況を踏まえて検証してくれというお話だったと思いますが、第3章以降にそれぞれ備えがどうだったのか、震災発生後の行動ということでその時

間系列での整理は個別にできるかぎりしたつもりでございます。

ただし、さきの佐々木委員の御指摘どおり、総括の部分でのまとめですね。具体的には7ページの対応状況とか、こういった部分の記載に十分反映されていないのではないかと御指摘がありましたので、今後、深めていきたいと考えております。

[加藤委員]

この報告書を読むかぎり、学校側として直接的な生徒の被害がなかった、大川小学校みたいな悲劇がなかったことから、ほぼ対応は完璧であったのではないかと私は思っています。

ただ、鶉住居幼稚園の職員の方と釜石保育園で薬師公園に避難した方が、保護者に2人引き渡して亡くなったということで、その2点が残念です。鶉住居幼稚園の場合、その前に避難訓練をされているはずなのですが、職員の方は鶉住居地区防災センターに避難したということで、その点がすごく気にかかるとのことです。一般の人もそうですけれども、鶉住居の悲劇の場合は、防災センターがすごく重要な要素になっていまして、どうして鶉住居幼稚園の避難訓練時に防災センターが第一の避難先になっていたのか、それが重要ではないかと思うのです。

つまり、指導する側に問題があったのではないかと。それをお聞きしたいと思ったのですけれども。

[菊池部会長]

個別施設の対応につきまして、菊池教育次長お願いします。

[菊池教育次長]

鶉住居幼稚園の事前の避難訓練の状況についてお話しします。鶉住居幼稚園の津波避難訓練は年に1回、2月頃に行われるということで、その年も実施したということは聞いております。

避難は一次避難が園庭ということになっていまして、その後については園長の指示によって避難することになっています。鶉住居の避難場所については、鶉住神社と常楽寺の裏山ということで、それについては確認されていたようです。

ただ、避難訓練で防災センターに避難したかどうかというのは確認されておりません。避難訓練が終わった後に行って、消防署の方の講話を聞いたというふうなことも漏れ聞いておりますけれども、避難訓練で防災センターに避難したという確認は取れておりませんので、そのところだけはお話をしておきたいというふうに思います。

[菊池部会長]

ありがとうございます。よろしいでしょうか。

先ほどの御意見にもあったと思うのですけれども、正しい避難場所の知識がどこまで浸透していたかというのも、1つの論点だったかと思えます。

そういった細かいところがすごく大事だと思うのですけれども、そこを突き詰めていきますと、今回の部会のテーマとさせていただいた、この先の子どもたちの安全をどう守っていくかというところになかなか議論を進めていけないところがあるかと思えます。

そのため、そういったところの検証をしっかりと深めていくとともに、またその先につながっていくような議論の展開というのも、私としては考えております。

大変恐縮ではあるのですが、ここで幾つか地域の事例を御紹介させていただければと思います。スライドを用意してまいりましたので、こちらを御覧いただければと思います。

先ほど、最初にお話しさせていただいた、今回の震災の小中学校の学校避難調査の調査結果を整理し

たものです。地形などでどこか分かってしまうかもしれませんが、ある A 学校さんとさせていただきます。こちら赤い線で書いてあるのが、震災前に計画されていた避難ルートと、当日、実際に行われた避難ルートです。校舎がこちらにあります、ここが校庭ですね。第一避難場所。それで、こちらのルート、それほど広い道ではないのですけれども、ここを通過して、高台の神社に避難されていました。実際、当日もこちらのルートを通っています。実はここが道路でして、こちらの先に、また違う学校施設があります、そこは長期間、滞在が可能な施設なのですけれども、この地点で、どちらに避難するか迷われたそうです。それで、こちらのほうは道が寸断してしまったというような情報が消防団から入って、いつもどおりこちらに避難されたのですが、大きな波が押し寄せて、一時、孤立状態になってしまいました。こちらの社務所に滞在していたのですけれども、すごく窮屈な状況で、夕方、夜になってから、この浸水した道を通って学校に戻っています。

ここで見えてくるのは、実際にしっかりと避難して助かったのですが、その先の助かった命をつないでいく対策ですね。避難施設がなかったということ。それで、この道を通って戻ってしまった、という教訓が現れている例です。その後、この学校はどうしたかといいますと、こちらは現地で再建しているのですが、翌年には避難ルートを変えています。校庭のこちら側に第一避難場所を移して、こちらにも、けっこう急な坂なのですが、高台につながる道があります。こちらに避難しようという声もあります。それで、ぐるっと回ってこちらのほうにつながっていく経路がありますので、その先の行動も考えるということで、変更いたしました。

さらに、翌年には学校が中心となって、市民の方々、保護者の方々を中心だと思っておりますけれども、アンケートを取って、避難ルートを新設しています。こちらに第一避難場所ですね。こちらは学校の敷地外なのですが、そこからこの道に一気に上がれるような避難階段を、住民の意見をまとめて市に提案して新設してもらうような事例です。

航空写真を見るとこのような感じなのですが、ここが学校です。それで、当初はこちらのほうに避難していたのですが、それをこういうふうに変えてから、一気にここへ上がれるように、避難ルートを変えています。こちらが実際に新設した階段になっています。学校と地域、行政が上手く連携して、対策が講じられた例といえると思います。

続いてこちらなのですけれども、こちらも沿岸付近のある学校です。ここはかなり高い位置が浸水していますので、移転が計画されています。当日の状況なのですが、地震が起きまして、事前に計画されていた避難行動とほぼ同様の行動が取れています。裏山に避難して、ただこちらではなくこちら辺りにいた生徒、体育館があるのですが、すぐ近くの高台、山に上がったと。それで、合流して上のほうに避難しているのですが、やはりこちらも滞在施設がなかったのです。それで、3.11 は当日すごく寒くて、私も記憶しておりますけれども、ずっと待機し続けるということはかなり困難だったと想像できます。それで、どうしたかといいますと、この先にある、浸水が免れた民家に、当日分宿させてもらっているのです。こちらが空中写真です。学校がこの辺りにあります、この辺りが浸水を免れている。高台はこのあたりです。その分宿させていただいたお宅なのですけれども、こうやって難を逃れたというようなところなんです。

最後にこちらは、徳島県徳島市の津田中学校というところなんです。先週アポイントメントが取れまして、こちらの勤めてらっしゃる先生にヒアリングに行ってきたのですけれども、平成 17 年から防災教育を始めておまして、ぼうさい甲子園という内閣府の取り組みがあるのですが、そちらで 2 年連続グランプリを取っているほど、有名な取り組みをしている学校です。

こちらが空中写真です。四国があって、端っこが徳島県になるのですけれども、沿岸がこちらでして、学校の位置はここです。津波避難ということで考えますと、環境や条件が悪いところといえます。ここに少しだけ小高い山があるのですけれども、ここしか避難場所がない状況で、ここは川ですので、ほか

に移動するとなると橋を通るしかないというような環境のところでは。

それで、実は中学校、小学校、幼稚園がかなり近い場所にありまして、この端っこにはここに保育園があります。ここは住宅地もすごく密集していますので、ここでの避難対策をどうしているかという、小・中・幼稚園などの学校施設が連携した避難訓練が行われています。

こちらが、ぼうさい甲子園2年連続グランプリを取った時に記念として作成された津波避難マップなのですが、中学校、自主防災組織、町内会、大学、行政などが連携して、このマップを作成されています。各場所からこの高台に避難するのにどれぐらい時間かかるのかとか、避難経路をどうするのかというのが、この地図に落とし込まれていて、地域が一体となって、土地の防災を考えていこうという例といえると思います。

写真が見難いかもしれませんが、校舎内に避難ビルがございます。小学校への避難だけで1,500名くらい集まってくると、もうきつくなのです。なので、高台だけでは間に合わない。ということで、校舎内にこうした避難ビルが用意されていたり、あと、こちらはかなり細い道で車移動は無理で、私も車で行ったのですが、詰まって引き返して来ました。そういったところで、どのような避難をしていけばよいかということを中心に考えていたのです。

これが山の道ですね。小高いと表現しましたが、けっこう急でもありまして、一番頂上に登ってみるとこのような感じで、こちらは海です。このように東日本大震災を踏まえて、いろいろと更に新たな対策、事前復興も進められているのですけれども、こういった事例も東北地方以外にもございます。ここからいろいろと学び取ることのできる知見もあるのではないかと捉えています。

今回、こういった事例を紹介させていただいたのですが、皆様には釜石の学校施設の状況に関する地図をお配りさせていただいていると思います。地形条件からしてもかなり厳しい条件で、高台の近くにありますので全く四国とは同じ条件とはいえないと思うのですけれども、完全に安全な場所に学校施設を配置するのはなかなか難しい土地柄であるといえると思います。こういったところで、地域の防災、安全対策、子どもの安全ということを考えていくと、学校施設だけではなくて、地域が一体となってどのような避難を考えていくのか。

引き渡しの件もそうですね。引き渡しに行かないという条件で学校の先生方が対応するとしても、そのためにはふだんから保護者や地域の方との約束事やコミュニケーション、信頼関係の構築など、話が戻るかもしれませんが、そういったことをどのように作り上げていくのかということのも、一つ大事な点だというように考えています。

この点について、何か御意見がございましたら、委員の皆様から挙げていただければというふうに考えております。

[佐々木委員]

学校と地域の関係についてお話をしたいと思うのですが、教育委員会とか学校の先生方にちょっときつい話になるかもしれませんが、私の子どもも鶴住居小学校、釜石東中学校にお世話になった時、二十数年前の話をする、地域の皆様と学校との距離感が近かったような気がしているのです。

例えば、学校を離れても、先生方との交流ができていました。たまに一緒に飲みに行ったりとか、レクリエーションしたりとか。あと、地域のお爺ちゃんお婆ちゃん、消防団の方々との交流など、地域の皆様と学校との距離が近かったような気がします。しかし、個人的な印象として、徐々に距離が離れたような感じがするのです。

こういうふうにいざ災害が起きた時に学校と地域との連携が大事だというのは、全くそのとおりなのですが、日頃、学校サイドが地域とどうお付き合いをするか、地域の中でお互いに支え合うというギブアンドテイクだと思うのですけれども、そういう学校と地域とのいろんな行事とか、あるいはいろんな

人間関係も含めて、少しずつ希薄になってきているような感じがするのですね。

学校教育というか、学校側の方針の中で、もう少し地域との関係をより強くするための取り組みというのが必要ではないかと思うのですけれども、その辺でもし今、現実的に何か検討されていることがありましたら、参考までに教えていただければと思います。

[菊池部会長]

御意見ありがとうございます。

菊池教育次長、よろしく願いいたします。

[菊池教育次長]

地域との連携という部分ですけれども、これまで十分ではなかったということについては、多分そのとおりでいいのだと思います。そういう意味で、ここの7ページから9ページのところに、地域との連携をこれから深めていくということの記述をさせていただいております。

ただ、全ての学校がそうだったかという点、そうでもありませんでした。例えば、釜石小学校の場合については、地域の皆様の応援をいただきながら、下校時の避難訓練を子どもたちには内緒でやったという事例もありますし、学校では学校支援地域本部という事業を立ち上げていまして、地域の皆様が学校に来てテストの点数付けをしてくれたりとか、あるいは本読みをしてくれたりとか、そういった取り組みをやっていたということです。

そういう取り組みが、震災の際には非常に役に立っているという事例もありますので、一概に学校と地域が疎遠になっているということではないのです。そういう事例もあったということで、更に連携を強めていくために今取り組んでいる状況でございますので、御理解いただきたいと思います。

[菊池部会長]

ありがとうございます。

そういった学校と地域との距離感といいますか、少し前は防犯の面から余り学校に人を入れないような体制もしなければならぬということもあったと思うのですけれども、よろしければ、森本先生から何か今の点に関してお話いただければと思うのですが。

[森本オブザーバー]

釜石東中学校でも防災に力を入れていこうというときに、防災ボランティアストとか、中学生に出来ることというときに、柏崎委員をはじめ、地域の方々から御協力をいただきながら、取り組みはじめたのが震災の2年前になるかと思います。例えば、安否札を配るという時にも町内会長や民生委員の御協力をいただきましたし、先ほども出ましたが、そういった学校、地域、行政の連携というのが非常に大事だと痛感しております。

皆で大事な命を守っていくということです。県の教育委員会でもこういった今回の教訓から、現在も学校、家庭、地域、そしてやっぱりそこには行政も入っているのです。防災もそうですし、まさに本日の報告にも入っておりますが、これから釜石や岩手を担う人材を作っていこうということで、今進めているところです。

正にこれはすごく大事な教訓です。本当に日頃のつながりがいざというときに判断や避難につながりますし、その後の命を守ることもそうですし、本当にすごく大事なことであります。私も思っています。

[山崎副市長]

どうしても委員と言いながら、行政の立場になりますことを御勘弁いただきたいと思います。

今の1つ目の、前からお話しされている学校ごとのマニュアルとか、あるいは対応の違いという部分が後ろのほうにありますけれども、私もじっくり読ませていただきました。それぞれが各学校の責任においてまず咄嗟に判断をして避難行動を取るといような一連の流れ、それから教職員の方々に関するいろんな本などを見ますと、それぞれの学校で対応が全く違ったのではないかという感じで、いろんな感想を持ちました。今回も同じような形の中での対応なのですが、それが今となっては大きな被害にそのままな事例と、それからたまたま運が良くて、それからいろんな人との関わりの中で上手くいったという、本当に少しの差が生死を分けたような事例が、今回の例だったと思います。

まず事実確認をきちっとするという部分では、けっこうな量で今回、各学校で深掘りをされたのかなということと、今まで避難行動という形の中でまとめられてきたということでは、一つの成果として検証してきたわけですが、今年の違いは、それに対して、じゃあどのように子どもたちを守っていくのでしょうかというまとめの部分なのですね。ある程度、各学校ではそれぞれ違うのですが、まずはトータルのものの考え方をしていきましょうという部分では、皆様の意見を聞く機会として、良い形なのではないかという思いをしています。

ただ、本日皆様のお話を伺いますと、これがどのような形で実践されるかという、次のステップが大事なわけですね。そこを今後どのようにするか、行政がどのようにするか、あるいは学校がどのようにするか、それから地域がどのようにするかというのが、今後の課題だというふうに思っています。

いずれ、これを繰り返してはいけないという話の流れの中で、皆様が同じ思いを持ってお話をさせていただいて、なおかつ検証として残していくということだと思いますので、その辺がまず大事だということです。

それから、もう1つ市の取り組みとしての地域との関わり、先ほど教育委員会からお話がされましたけれども、教育委員会サイドだけではなくて、地域としてのコミュニティ作り、あるいはまちづくりという観点からの地域のつながり、あるいはまとまり、それから当然こういう防災の関係を含めて地域づくりをしましょうという動きがありまして、まず学校のほうにはコミュニティ、地域の地元学、自分の地域を誇りにしようという意味での取り組みをしてくださという市の方針が1つございます。それから、地域との関わりを持つ中で、そのまちづくりの中に学校はどのように位置付けられるのかという部分を含めて、これを深めていく必要があるのではないかと思います。

それは、地域性の違いがある中で当然行われていくことですから、どういう形で位置付けをするかは、それぞれの地域が決めていくことだと思います。けれども、それを作り上げていくということの思いが地域には必要なのではないかと、地域会議とかそういう取り組みの中でまちづくりをしましょうということで、市は取り組んでいるつもりでございます。その辺を踏まえて、各地域の町内会とか、学校のPTAの方々を含めた地域会議を形成しているということで、その辺を御理解いただければというふうに思っていました。

[佐々木委員]

今、学校なり行政なりの取り組みについてお話しいただきまして、ある程度、私の理解不足のところもあったのではないかと、反省しています。今後のこととお話ししますと、これまでの震災前の地域と学校とのつながりは、震災後になったときには、もうほとんど崩壊しているわけです。そして今、地域会議やまちづくりと言っていますけれど、実際その地元にどれだけの人が戻ってくるのかということなのですね。

大幅に人は減少するわけです。そして、若い人というか、ある程度中堅どころの人たちは、どんどん外に出て行ったりして、残るのは高齢者と子どもになる。そういうふうに、震災前と震災後では環境が

ものすごく変わるわけですよ。その中でどうやって町を作っていくか、それが難しい問題だと思っています。

それで、私も町内会の役員の1人として、出来るだけ地元を早く復興させるということと、地域のコミュニティをどう維持していくかということは、ものすごい頭の痛い問題です。なので、まず私とすれば、自分の地域をしっかりとめて、これから将来に向かって皆で力を合わせていこうというところを今、皆でやっているところなのです。それがそれぞれの各地域で、苦しみを乗り越えて新しい町を作っていくと。そして皆で未来に向かって頑張っていくというふうになってくれればいいのですけれどもね。地域によっては必ずしもそうではない。かなり戻る人が半分以上というところがあるかと思います。

地域が昔のような歴史において活動できたものというのが、これからは出来なくなってくる可能性が非常に高いわけですから、そういう現実を見ながら、まちづくりと併せて学校との関係をどう持っていくかというのは、今までの延長線ではないと。やっぱり新たな考え方で、地域と学校との関係を作っていかなければならないのではないかと考えているところです。

[菊池部会長]

ありがとうございます。今の御意見に対して何かありますでしょうか。

おっしゃられたように、全く被災地ではかなり厳しい状況で、人口減少が進んでいた中での被害ですので、更に加速化してしまうということは、社会問題としても取り上げられているところだと思います。

ただ、個人的な考えを少し言わせていただくと、これまで培ってきたその土地における生活・文化、地域のつながりは、何らかの形で残ると思うのですね。全く新たな形でこの先の学校と地域の関係が生まれるのではなくて、そこで培われてきたものを踏まえた上での新たな姿があるのではないかとこのように考えております。

もしよろしければ、柏崎委員のほうから、これまでの地域と学校のことについて、地域側からの視点で御発言いただければと思います。

[柏崎副委員長]

少なくとも学校というのは、地域コミュニティの中心であってほしいという認識、また当然そうなければならぬだろうという認識は、ある程度、地域でもございます。

一方で、各地域がどれだけ防災の知識というのを持っているのだろうかということ、これは全くお粗末な状態であると、あえて私はそう言わざるを得ません。先ほど佐々木委員も言っていましたけれども、少なくとも学校と地域の関連というのは、全くまっさらな状態で、今後こうあるべきだということを構築する必要があるだろうと言われているのは、的を射た御意見だと思っています。長い間、地域と学校との関係が十分ではなかったということの反省になって考えなければいけないと思っています。

ただ、先ほど森本先生も県の立場を踏まえながら遠慮そうに言われましたけれども、釜石東中学校に森本さんがおられた時期、地域と学校の関係の構築に非常に努力をされて、その過程で私も幾つかのことを提案したり、一緒になって考えたりしたわけです。

東日本大震災以前は、もう学校は学校で何とかいろいろ考えてやっているだろうという思いで、余り地域に関与してこなかったのです。けれども、会社をリタイアして時間のある人間が集まって、「これでは放っておけないではないか、少しうるさいぐらい学校にも関与していこう」ということで、一緒になって行動をしました。

その結果、地域のほうでも一部から批判をもらったのだけれども、中学生になったら、もう助けられる人ではなく、助ける側に立たなければいけないということで取り組んできました。そして、今や当たり前のごとく学校と地域の間で認識されるようになってきました。それは、やはり地道な努力の結果、

生まれてきたものですから、今後も努力していかなければいけないと思っています。

生活の知恵だとか、あるいは我が家で両親がなかなか子どもに体験をさせられないような取り組みも、我々地域の何人かで学校と一緒に考えていきました。やればできるけれども、今までただそれをやらなかったのです。その原因は何かというと、自主防災会という組織作りが先に進んでしまって、自身の議論が全然成されていなかったからだとこのことを猛省しなければいけないでしょう。

一方、私は本日、この皆様の会議でいろいろ議論されているところ、特に質問という形で言われているけれども、皆様から出た質問はものすごく厳しい質問だというふうに聞かせていただきました。正に、課題なのです。皆様から出された質問は、検証という立場から考えたら非常に大事な1つの課題、指摘であると思っています。

そういう面で考えますと、7ページ、8ページにそれが十分に深掘りされているかということ、それはなかったのです。特に7ページについては、もう少し吟味した記述がなければいけないと感じています。というのは、課題が幾つか指摘されましたし、それに対する対応策というものも記述されていますが、課題と対応策が必ずしもマッチしてないのです。課題の中に対応策の幾つかが含まれていると取れるところもあるわけですが、少なくとも課題、指摘があつて対応策というのはここに述べられていかなければならないと思いますし、7ページ、8ページは、もう少し深掘りされることによって、今後の取り組みに非常にプラスになるとと思っています。

本日、マニュアルの話も出ました。我々民間で常に考えさせられることは、やはりいろんな部分がありますから、1つの統一見解として粗いところはあるけれども、各セクション、各組織の統一見解はやっぱり示されるべきだというのが我々の持論です。教育委員会は多分、各学校にこれが基本になるマニュアルになるというものを示しておられなかったのではないだろうか。その辺が浮き彫りにされていないですよ。事実は事実として、そういうものをしっかりと把握したのが検証であると、そんなふうに感じました。

それから、教育委員会に恐縮だけでも、おそらく防災については丸投げ、校長任せというような状態だったのではないのでしょうか。もしかすると、マニュアルもなくて、防災教育をしっかりとやりなさいということだけで済まされていたのではないかという心配があります。

先ほど教育次長からも、もう一度現実をチェックしてみるという発言がありました。これは大事なことです。我々はしっかりとそこを抉るということで、少なくともどのようなマニュアルの精度で校長たちに示したらよいかということも、その検証結果で決まってくるのではないかと思います。

本日、皆様の議論を聞いていると、やはり遠慮されている方が多いと思います。非常に厳しく言っているはずなのだけでも、表現は非常に優しく言っています。しかし、こんな優しいことでは本当の検証に到達しないで終わってしまうのではないかという心配を抱いております。

本当に、皆さんの本日の指摘は非常に素晴らしい内容です。私ども他の部会で逐一紹介して、この雰囲気伝えて、他のほうでも精度の高い検証をしていただくように、私なりに努めていきたいと思っています。

事例として紹介しておきますけれども、今、幾つかの学校で、放課後子ども教室というものをやっています。放課後子ども教室の安全管理などというのは、学校を離れてしまうのです。時間が終わっているものですから、誰も監督する人はいない。その中で地域ボランティアが子どもの指導管理から施設の管理まで、全部責任を負ってやるということで取り組んでいます。これは、今、立派にやれるようになりました。

実は、私も審議委員の1人をしておりまして、最初に疑問に感じたのは、責任を持てる人は誰なのか、事故があったときにどうするのかというマニュアルがなかったことです。これには私もびっくりしました。教育委員会の社会教育委員会で早急にこれをやろうではないかと言って、曲がりなりにもマニユア

ルを完成させました。それで、放課後子ども教室をしている学校がそれを基本にして、日常の管理ができるようになったという経過もあります。

学校の場合というのは、そういうものがある意味、馴染まないのですね。しかし、そういうのが当たり前になってきていたこともあるのだから、この震災を契機に今までの取り組みはもう変えていかないとはいけません。変えたほうがいろんなものの解決につながってくるのではないかと、そんな思いを本日は持たせてもらいました。

[菊池部会長]

ありがとうございました。率直な御意見をおっしゃっていただいたと感じております。

また、地域ボランティアという新たな力といいますか、そういったことも今後活用し、積極的に取り組んでいくことで、防災対策、防災力強化を図っていくということの重要性を感じております。

時間も過ぎてきておりますが、もしよろしければ、唐丹小学校 PTA から御参加いただいている雲南委員から、今までの御意見を受けまして、何か感想など考えておられることがありましたら、お話しただければと思います。

[雲南委員]

皆様の意見を聞いていますと、私が教えられるようなことばかりで、何も意見はできません。そんな感じで、皆さんの意見を聞いてメモしたり、勉強になるような意見を聞くばかりです。

[菊池部会長]

雲南委員は、実際、唐丹小学校さんにお子様がいらっしゃるのですよね。

[雲南委員]

はい。

[菊池部会長]

これまでの唐丹小学校さんとのつながりでしたり、震災後に何か変化があったりというところはございますか。

やはり、日常的な学校と地域の距離感というのは、余りなかったというふうに感じていらっしゃるのでしょうか。

[雲南委員]

いえ、自分はそれほど積極的に関わってこなかったというのがありますので、ちょっと何とも言えません。

[菊池部会長]

ありがとうございます。

本日伺ってきた中で、幾つか課題というのは出てきたかと思えます。まず、当日何が起きたのかという事実をしっかり明らかにすること。深めれば深めるほど、たくさんの課題も出てくるところで、しっかりといつまでにとというのは難しいところなのかもしれません。ただ、そのことは忘れずに取り組んでいく。それが大事なことだというふうに感じました。

また、その一方で、今後の対策についても考えていく。それにはコミュニティ、地域と学校と行政と

の連携。柏崎委員のほうからも指摘がありましたように、震災以前は森本先生の取り組みなどポイントはあったと思うのですが、まだまだ十分ではなかった。それを今後どのように改善させていくのか、新たな町の姿との関連もあると思うのですが、それを踏まえながらどのように新たな町の姿を描いていくのか。それが大事な点ではないかというふうに考えております。

本日の意見を聞きまして、何か御意見をいただければと思います。よろしく申し上げます。

[市川委員]

まとめの意見ということではなくて、本日せっかく森本先生がいらっしゃるの、当時の釜石東中学校の取り組みでお伺いしたいことがあります。

平成21年に釜石東中学校で津波の防災意識の啓発としてDVDが作られた経緯があると思うのですが、そこに津波から無事に避難するためにしておくべきことや、日頃から備えておくべきことなどがまとめられていたと思います。

今回、被災をした上で、その振り返りというような教職員の試みはあったのでしょうか。

[森本オブザーバー]

振り返りでしょうか。

[市川委員]

作っていたこと、取り組んでいたことに対して、実際こういうふうには被災し、避難したということで、今までの取り組みを基に、教職員でそのDVDについて総括的に振り返ったり、それがどう生かされたか検証し合うといった機会はなかったのでしょうか。

[森本オブザーバー]

あのDVDは、自分が担当していた一年生とまとめた物です。その当時、子どもたちとともに、正に地域の方々と学びながら、そして先ほど柏崎委員からありましたが、中学生として担い手になれるように、更に地域の中で動くように、助けられる人から助ける人へというスローガンを掲げた、そのDVDですね。

釜石東中学校には度々行っていたのですが、その後、私は転勤してしましまして、その後、大槌にずっといました。ですから、震災後、学校として最終的に総括したかどうかというのは、はっきりと分からないですね。ただ、その後、当時の先生方のいろんな発表の中で、やってきた部分が生きたというふうに感じました。

あと、当時の村上副校長と盛岡でお会いした際には、津波もそうなのですが、土砂災害についてもやる必要があると言うので、私も転勤した後、土砂災害についても学習していました。その時には、ございしょの里から更に行くときの判断になって、それも学習していてよかったというお話を伺いまして、私たち教職員の勉強にもなる場所がありましたので、子どもたちの学習とともに自分でもそう思ったのです。子どもたちの教育を通して、自分も子どもたちとともに学んでいくという部分がありました。

[市川委員]

取り組みを作っていて被災した私たちだからこそ、振り返りができると思ったため、今お聞きしました。

申し訳ありません、ありがとうございます。

[森本オブザーバー]

いえ、すごく大事なところだと思います。

[菊池部会長]

ありがとうございます。ほかに御意見などございませんでしょうか。

本日は、前もって勉強されていたというのものもあるかもしれませんが、皆様から率直な御意見をいただけたと感じております。この内容を踏まえて、検証報告書を更に詰めていただけるというふうを考えております。

次回ですけれども、想定させていただいているテーマとしましては、さきに説明させていただいたように、地域で子どもたちをどう守っていくのかということにポイントを挙げていければと考えております。本日、話題になりましたが、地域との連携のあり方ですね。

やはり、本日、いろいろと御意見や課題をいただきまして、どう解決していこうかと。今回、報告書の中で改善策、対応策については述べられていますけれども、いざ実際に動かしてみるために、どうやれば実行できるのかと考えると、この点がすごく重要になると考えております。一步を踏み出すところで、皆様の御意見をいただければというふうと考えております。

それでは、司会を事務局に戻したいと思います。事務局、お願いいたします。

[千葉総務課長]

次第の4番、その他の今後のスケジュールについて、白澤震災検証室長が説明いたします。

[白澤震災検証室長]

長時間に亘りまして、御協議いただきまして、ありがとうございます。

次回の開催ですけれども、2月17日午後6時から予定しております。よろしく申し上げます。事務局からは以上です。

[千葉総務課長]

それでは、若崎副市長からお願いいたします。

[若崎副市長]

皆様、長時間に亘り熱心な御議論、ありがとうございました。

部会長として、特にこの場の議事をリードしていただいた菊池先生と森本先生に、御礼を申し上げます。お二人は本日、盛岡から来られたそうです。運転されてきたので、本日このまま帰るのではないかと本当に心配ですが、幸い釜石にお泊りいただけるということで、大変安心しております。今後とも、ひとつよろしく申し上げます。

本日の資料の提出と皆様からの御議論を踏まえますと、震災前の備えについてはいろいろ評価する部分も勿論ありましたが、反省するところも多々浮き彫りになっております。例えば、引き渡しのお話などもございました。引き渡しの訓練を見て、本当に大丈夫なのかといった率直な疑問も当時あったというお話もありましたし、実際の避難行動では車の往来はむしろ避難行動を妨げたといった生々しいお話もありました。これは本当に大事な話でして、だからこそ車避難は止めて徒歩避難だといったことも提言させてもらっているわけです。

それから、学校での引き渡しは、学校が安全な場所にあるということを前提に、もう絶対に引き渡さ

ないといったことを市の教育委員会が決めました。これは本当に正鵠を射た方法での決定だったと思っていますし、そういうことも全て教育委員会のまとめた方向性として、裏付けられる内容だったかと思っています。

しかし、まだまだ7ページの課題については甘いのではないかと。それで、実態を更に把握していただきたいといったお話でしたので、それをしっかり踏まえて、今後の資料の保管に努めてまいりたいと思っています。その思いは、二度と悲劇を繰り返さないという決意ですし、これはまちづくりに直結することだと思っています。

皆様からいろいろ出された地域と学校の距離感、地域と学校の関係、これが正に地域は学校の要であり、学校が地域の要であり、学校を拠点にしてまた地域の皆さんがそこに集まってくるというまちづくりを進めていくのだという思いに直結していますし、これからもそういう方向でまちづくりを進めていこうと思っていますので、これも方向性は合っていると思っています。

それと、中学生は本当に助けられる側ではなく、助ける側であるという防災教育。これこそ、正に片田先生の三原則の教えなのです。率先避難というものは、それは自分が助かればよいだけではなく、自分が助かって人を助けるというところにつながっているわけです。正に、この教育を本当に大事にしていきたいと思っています。

次回の学校部会が、この先の学校・地域・行政との連携の在り方になっていますので、次回また皆様からいろいろと御議論いただいて、この部会を盛り上げていただきたいと思っています。

本日は本当に長時間ありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。

[千葉総務課長]

ありがとうございました。以上で検証委員会の学校部会を終了いたします。皆様ありがとうございました。

以上